

## ■ ドル独歩高の動きもそろそろ一服か？

ついにドル/円が1990年4月高値を上抜け、一時的にも160.87円処まで上値を伸ばす動きとなった。言うまでもなく、今年4月高値=160.23円処をも上抜けたことで、ストップロス・オーダーを巻き込んで買いが加速した格好。NY時間に入って、神田財務官は「足元の動きは過激」との認識まで示していたが、それでも具体的な介入の動きは見られておらず、むしろそのこと自体がドル/円の一段の上昇に加勢したとの感さもある。

本邦当局の介入に対するイエレン米財務長官のこれまでの発言などを考慮すると、余程のことがない限り当局は無闇に動けないとの見方が市場にはあり、少なくとも鈴木財務相や神田財務官による口先介入には何ら効果が見られないと認識しておかざるを得ない。

こうなってくると、もはや日銀が“次の一手”を打たないことには、円安の流れに歯止めをかけることは難しい。とはいえ、次に日銀が具体的な材料を市場に提供するのは7月9-10日に行われる「債券市場参加者会合」ということになりそうで、それまでにはまだ少し時間がある。

その間、ドル/円がもう一段の上値を試すとすると、2022年10月高値から2023年1月安値までの下げ幅を1.382倍した値に同安値に加算した値=161.35円処が一つの目安になると見られる。

もっとも、債券市場参加者会合を通じて国債買い入れ減額の詳細が市場に伝えられ、それで市場に大した混乱が生じなければ「それは7月利上げの制約にはならない」と見る向きもある。25日にブルームバーグが行った調査でも、回答した43人のエコノミストのうち33%が「7月の政策会合で日銀は追加利上げの実施を決定する」と見ているという。

もちろん、その前に明日(28日)発表される5月の米個人消費支出(PCE)価格指数の結果と、それに対する市場の反応を確認することがまずは重要。米インフレ鈍化の傾向があらためて確認される結果となれば、意外なほど素直に市場がドル売りで反応する可能性も十分ある。

依然として、足元でドル独歩高の状況が続いていることに変わりはないが、下図にも見られるとおり、目先的にもユーロ/ドルには下げ渋る動きが見られていることも事実。前回更新分の本欄でも述べたように、ユーロ/ドルは今月14日に一時1.066ドル台まで下押ししたところで下げ止まり、一旦反発した後は一目均衡表(日足)の「転換線」に上値を押しえられながらも、基本的には1.066ドル処を下値サポートと意識した動きが見られている。

この1.066ドル処というのは、4月安値から6月高値(1.0916ドル処)までの上昇に対する76.4%押し水準にあたり、やはり目先は下値が支えられやすい。実は、6月高値というのも3月高値から4月安値までの下げに対する76.4%戻しの「節目」にあたる水準であった。ちなみに、スイスフランも対ドルでの下げを続けているが、足元のドル/スイスフランは一目均衡表の日足「雲」下限に上値を押しえられる格好となっており、このあたりでスイスフラン安も一服する可能はあると見られる。

いずれにしても、ユーロに関しては日曜日(30日)のフランス総選挙の第1回投票の結果をしかと見定めるしかない。もはや、フランスが欧州連合(EU)やユーロから離脱するといった心配はなくなったと言えそうだが、右派政党の国民連合(RN)を率いるルペン氏の発言力が一段と強まった場合、同国の財政赤字への懸念が一層強まって、それがユーロ売りにつながる可能性もあると心得ておきたい。

(06月27日 09:40)

